

表 2 危害要因の性質等について（寄生虫）

## ○ 概要

- ・食肉等の生食により、ヒトへ障害を及ぼす主な寄生虫について取りまとめた。（表 2）
- ・細菌、ウイルスと同様に、一般集団に対する重篤性を考慮し、ヒトに対する影響の大きさを分類した。

病原体	病原体の性質等		ヒトへの感染源等		ヒトの主な症状	危害要因の 影響の大きさ (案)
	中間宿主	終宿主				
有鉤条虫	豚等 (虫卵を摂取すると、囊虫 症になる。)	ヒト (成虫は小腸に寄生)	豚 猪	筋肉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・囊虫を有する豚肉を摂取すると有鉤条虫症(成虫が小腸に寄生)：症状は軽微。腹部膨満感、悪心、下痢、便秘。</li> <li>・虫卵を摂取すると有鉤囊虫症(眼、心臓、肝臓等に囊胞を形成)。脳に寄生すると致死率 60~90%。</li> </ul>	B
トキソプラズマ	猫以外の動物 (オーシスト*が摂取されると、無性生殖し、筋肉、脳、主要臓器にシスト*として存在。)	猫 (成虫は腸管内に寄生。糞便中にオーシストを排泄)	豚 羊 山羊	筋肉 脳	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オーシスト</li> <li>・シストを含む中間宿主の食肉等。</li> <li>・シストは加熱処理で感染性消失。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ほとんど不顕性。重篤な場合は、リンパ節炎、肺炎などを起こし、死に至ることもある。</li> <li>・妊婦に感染すると胎児が先天性トキソプラズマ症(水頭症、視力障害、脳内石灰化、精神運動機能障害)</li> </ul>	
旋毛虫 (トリヒナ)	宿主域は広く、陸棲・海棲のほ乳類や鳥類等に寄生 ・同一宿主に成虫(小腸)、幼虫(筋細胞)に寄生(宿主は終宿主であり、中間宿主でもある)		豚 猪 熊	筋肉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼虫寄生の食肉。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・筋肉痛、発熱、悪寒、浮腫、好酸球増多。重症の場合は心不全、肺炎を併発し死に至ることがある。</li> <li>・致死率 0.2% (重篤性は摂取した幼虫の数に依存)</li> </ul>	
無鉤条虫	牛 (虫卵を摂取すると、囊虫症になる)	ヒト (成虫は小腸に寄生)	牛 羊 山羊	肉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・一般的に無症状、食欲不振、腹痛など。</li> <li>・囊虫症は起こさない。</li> </ul>	D
肉孢子虫	草食動物 (筋肉中に虫体を内包するサルコシスト*を形成)	イヌ・ネコ科の食肉動物、ヒト	牛 豚 馬	筋肉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・オーシスト</li> <li>・サルコシストを含む食肉。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・消化管サルコシスティス症：下痢や嘔吐等。</li> <li>・筋肉サルコシスティス症：発熱や筋肉痛。</li> <li>・症状は一過性、自然寛解する。重症化事例の報告はない。</li> </ul>	
アジア条虫	豚 (虫卵を摂取すると、囊虫が肝臓に寄生)	ヒト (成虫は小腸に寄生)	豚	肝	<ul style="list-style-type: none"> <li>・囊虫寄生の肝臓。</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・下痢と不快感。</li> <li>・虫卵を摂取しても囊虫症を引き起こすことはない。</li> </ul>	
ウエステルマン肺吸虫	淡水産のカニ (幼虫が寄生) ・猪が幼虫を有する中間宿主を摂取すると待機宿主となる。	イヌ・ネコ科の食肉動物、ヒト (成虫は肺に寄生)	猪	筋肉	<ul style="list-style-type: none"> <li>・幼虫寄生の肉。</li> <li>(幼虫寄生のサワガニやモクズガニも人への感染源として重要)</li> </ul> <ul style="list-style-type: none"> <li>・発咳・血痰</li> <li>・皮膚や脳の異所寄生もあり、虫の異動に伴い腫脹がみられる。(脳内では頭痛、嘔吐、てんかん発作を起こす)</li> </ul>	C

※環境中にあるのはオーシスト、食肉中にあるのはシストやサルコシスト。